

1、はじめに

- ・親鸞にとっての「浄土真宗」
「智慧光のちからより 本師源空あらわれて
浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまう」(『高僧和讃』)
「真宗興隆の大祖、源空法師」(『教行信証』)

2、親鸞が求めたこと

- ・比叡山での学び…断惑証理(惑いを断って真理をさとる)の修行
真面目さを誇るという問題が出てくる。人間の心が陥る「執われ」という落とし穴。
→修行の度合いによって、優劣を競い、人を序列化することが起こる。
- ・比叡山の現実
最澄(伝教大師)以来、誰もが平等に成仏する「一乗」という理想を掲げていた。
しかし、現実には出家・在家、男・女、善人・悪人という簡びがあった。
→真実に迷いを出離することができる道を求めて下山した親鸞。

3、法然上人との出遇い

- ・「ただ念仏」の教え
「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」(『歎異抄』)
→阿弥陀仏によって成り立つ仏道との出遇い
この根には自分がどんな者であるのかという人間観の転換がある。

4、「専修念仏」の弾圧

- ・法然上人に対する旧仏教からの批判
『興福寺奏状』は九か条の過失を挙げ、朝廷に訴える。
結果として、法然を含め8人が流罪、4人が死罪となる。親鸞は越後へ遠流。
→親鸞は、生きた仏教の危機として受け止めた
ここに立って親鸞は、誰の上にも真実に迷いを超えることが成り立つ仏道として、「浄土真宗」を顕らかにしていく。それが『教行信証』の執筆。

5、まとめ

- ・親鸞という人
法然上人を「宗祖」として仰いで生きた人
「愚禿釈親鸞」と名のつた人
→浄土真宗に出遇い、浄土真宗に生き、浄土真宗を顕らかにした人